

区民文教委員会 行政調査報告書

1 調査期間

平成22年10月5日（火）から10月7日（木）まで

2 調査先及び調査事項

（1）高知県高知市（10月5日）

「文化振興・教育施策について」

「文化プラザ・かるぽーと」、「横山隆一記念まんが館」、「自由民権記念館」、「龍馬の生まれたまち記念館」に関する調査・研究。

（2）高知県南国市（10月6日）

「環境・教育施策について」

環境政策の理念や策定すべき政策などの基本事項を示した「エコプラン推進基本大綱」及び「つたえたい 読書の喜び楽しさを」をテーマにした「子ども読書活動推進計画」に関する調査・研究。

（3）高知県（10月7日）

「文化振興施策について」

坂本龍馬の顕彰施設としての機能の充実等を運営の基本方針として、文化振興施策を推進している「坂本龍馬記念館」に関する調査・研究。

3 参加委員

委員長	中村光雄
副委員長	片倉洋
委員	高橋正利
委員	はらつとむ
委員	沖山仁
委員	大越勝広
委員	瀧澤良仁

4 同行理事者

教育委員会事務局次長 小暮真人

5 調査概要

別紙のとおり

調査概要 【高知市】

1 市の概要

高知市は、高知県のほぼ中央部に位置する、人口約34万人の中核市で、高知県の県庁所在地である。

北部は、四国山地の裾野となる険しい山々に囲まれていて、南部は、高知平野を経て、黒潮の暖流がめぐる太平洋に臨んでいる。市内を流れる清流・鏡川は、土佐山に源を発し、鏡を経て市中央まで、いくつもの支流を集めながら31キロメートルにも及び、浦戸湾から太平洋に注ぎ込んでいる。この鏡川の流域面積は、約170平方キロメートルで、これは市の総面積のほぼ3分の2にあたる。平野部は、この鏡川と市の東部を流れる国分川などによって形成された沖積平野となっていて、東部には、肥沃な美田が続いているが、標高が低く、特に河口付近には、約7平方キロメートルにわたって海拔ゼロメートル地帯が広がっていることから、過去においても幾多の水害を経験している。山間部は、工石山陣ヶ森県立自然公園や北山県立自然公園を擁するなど、県を代表する豊かな自然環境が今も残っていて、住民の憩い・安らぎの場となっている。気候は、梅雨時の雨量が多いこと、夏から秋にかけての台風の影響によるまとまった雨が多いことなどから、年間降水量は多く、気温は、日照時間が長いことや暖流の影響などにより比較的温暖である。

また、高知市は、山内一豊の入府以来、土佐藩の城下町から発展した都市で、高知県中部の中心都市であると同時に、四国太平洋側の中心都市にもなっている。県内最大の商業地を持つと同時に、県内の人口の40パーセントを占めるプライメイトシティ（一極集中型都市）でもある。都市名の由来は、高知城の周辺は、鏡川などの川に挟まれた地形であったため、高知城は当初、「河中山城」と呼ばれていたが、連年の水害に悩まされたため、二代藩主・山内忠義の時代になって、この文字を忌み嫌って、音を借りて「高智山城」と改め、やがてこれが略されて「高知城」となり、これが今日の高知市の名称の起源となっている。

また、高知市は、国内では酒類の消費量が多い都市の一つで、名物には、カツオのたたきとよさこい鳴子踊りがある。また、日曜日を初めとする定期市（いわゆる「曜市」。開催場所、形態や運営方法は異なるものの、月曜日を除く毎日、市内で開かれている。）が有名であり、「スローライフ」志向が強いとする見方もある。1998年に市の中心部に開設された「ひろめ市場」は、地元資本が運営をしていて、コンパクトな造りに比して多様な店舗（飲食店、食料品店が多い。）の利用を楽しむことができるため、休日を中心に市内外からの来店者で賑わっている。

（参考資料 地方公共団体総覧ほか）

2 調査事項

（1）文化振興・教育施策について

ア 「文化・教育施設の運営」

高知市は、地域の特性を生かした「文化プラザ・かるぽーと」「横山隆一記念まんが館」「自由民権記念館」「龍馬の生まれたまち記念館」等を設置し、文化振興・教育施策に取り組んでいる。

「文化プラザ・かるぽーと」は、市民の文化創造と生涯学習の拠点として、高知市の文化を創造・発信する複合文化施設で、施設内には中央公民館、市民ギャラリー、ホール、スタジオ等があり、また施設内にある「横山隆一記念まんが館」は、高知市名誉市民であり、日本のまんが家として、初めて文化功労者となった天才まんが家・横山隆一を記念して、高知市が7年の歳月をかけて作ったもので、横山隆一のユーモアあふれる人生、業績を顕彰するとともに、まんが王国・土佐が生んだたくさんの県出身のまんが家をたたえ、まんが人材の

育成とまんが文化の継承、発展への貢献を目指している。

また、「自由民権記念館」は、高知市制100周年を記念するにあたり、新たな100年へのシンボル施設として、自由民権運動の資料を中心に土佐の近代に関する資料を広く収集・保管・展示して、確実に次の世代へ引き継いで行くために高知市が建設したもので、自由民権運動と土佐の近代史から学び、その意義を現代及び未来に生かすものとして市民自治と文化の新たな発展に寄与することを目的にしている。また、「龍馬の生まれたまち記念館」は、坂本龍馬を生み育てた「家族」「まち」を紹介し、世界や国家の変革期にあって、その困難を乗り越えさせた坂本龍馬という人材がなぜここに育ち世に出たのかを顕彰し、坂本龍馬を中心とした歴史・観光・文化の推進とコミュニティ育成のまちづくりを目指して、高知市が誕生地である上町に作ったものである。また、この記念館は、建築作品としての評価も高く、公共建築賞優秀賞をはじめ数多くの賞を受けている。

それらの取組状況及び運営等について調査するものである。

3 主な質疑応答等

【「文化プラザ・かるぽーと及び横山隆一記念まんが館の運営」について】

Q：指定管理者についてであるが、平成21年から平成23年までは高知市文化プラザ共同企業体（4社JV）を指定しているが、この4社JVはすべて民間なのか。また、高知市文化振興事業団が運営とソフト事業に関して委託をされているが、これは高知市文化プラザ共同事業体から再委託という形で行われているのか。

A：4社は、すべて民間である。また、横山隆一記念まんが館と中央公民館の運営とソフト事業については、再委託ではなく、高知市から直接委託を受けている。なお、文化事業の実施については、補助金を受けている。横山隆一記念まんが館と中央公民館の企画した事業については、高知市から業務委託を受けている。

Q：横山隆一記念まんが館の運営についてであるが、「消防士・消防団員を主人公とした漫画・ビデオコンクール」を実施しているが、これは地域からの要望によって行っているのか。

A：これは、全国の消防庁が企画したコンクールである。ただ、まんがを描いている高知漫画集団というグループがあるが、その中に高知市の消防団の団長がいて、消防庁のコンクールに作品を応募したところ大賞を受賞した。そこで、その作品を紹介させてもらった。

イベントに関しては、一定のテーマを高知のまんが家がそれぞれ設定して、開催をしている。

Q：高知市文化プラザ共同企業体（4社JV）は、文化プラザ（かるぽーと）を維持管理するために高知市がつくらせたものか。

A：公募をしたところ、文化プラザ（かるぽーと）の維持管理にかなりいろいろな面があるので、舞台の専門の業者等、4社がJVをつくって応募してきた。指定されたところが、この4社JVであるが、ほかにも舞台関係の業者と設備のメンテナンス関係の業者がJVを組んで応募してきたところもあった。

高知市は、全く関係なかった。名前については、4社が一緒にJVを組んだので、業者がこういう名前を付けた。

Q：この高知市文化プラザ共同企業体（4社JV）は、文化プラザ（かるぽーと）のほかに何か指定管理者を受けているのか。

A：この4社JVは、今のところ文化プラザ（かるぽーと）だけである。ただし、4社の中の舞台関係の業者等は、ほかの施設において、1社だけで指定管理者になったりしている。

Q：「まんが・漫画・マンガ展！」は、開設当時から行っているのか。また、関連イベントの似顔絵コーナーで、「NPO法人高知こどもの図書館」へ募金の寄付を予定していると書いてあるが、毎回、寄付をするところが変わってくるのか。

A：当初、いのちの基金は、高知新聞社経由ではじまって、いろいろと昨年まで行ってきたが、今年、高知漫画集団と高知漫画グループくじらの会の総会で、自分たちのような文化的な団体で寄付ができないかということで、今回から高知こどもの図書館との連携の中からそちらのほうへ寄付させてもらうようになった。

Q：「NPO法人高知こどもの図書館」は、どういう団体なのか。結構、長い間活動をしている団体なのか。

A：実際に活動しはじめたのは、それほど歴史は古くない。こども向けの優良図書関係等で紹介したい本を独自の視点で集めて、図書館として使っている。

Q：文化プラザ（かるぽーと）のホールの使用料は、どのぐらいか。

A：大ホールの使用料については、入場料によって区分がいろいろと分かれている。大ホール・小ホール・ギャラリーについては、使用者数は資料に載っているが、昨年であると、利用料金収入は年間で9,500万円ぐらいである。使用料については、条例でランクが分かっている。

平日で、たとえば2,000円以下の入場料であれば、全日（午前・午後・夜間）で23万円強ぐらいである。これが、5,000円を超える入場料であれば、全日で38万円である。なお、付帯設備については、また別にそれぞれ使ったものによって決まっている。

減免については、市主催のもの等、その内容によって減免制度がある。

Q：文化プラザ（かるぽーと）ができたことによって、統廃合された施設はあるのか。または、全く新しく施設として拡充されたのか。

A：統廃合はなかった。

ホールが県民文化ホールぐらいしかなかったので、やはり新しいホールが必要であるというところから建設された。

Q：スタジオの稼働率が50.1パーセントということについては、何かネックになっているものがあるのか。

A：一般的には、料金が低いといわれている。割とグレードの高い設備を使っているのですが、一般的にアマチュアの人にとっては、少し高いという懸念がある。

やはり夜間の利用が多く、昼の利用がなかなか伸びない現状もある。また、学生が使いにくい料金設定になっているため、民間のスタジオや市の文化会館等の安めの施設を使用しているケースが多い。

Q：市民の税金を使って、こういった施設を建設し運営していく上で、これだけ大勢の市民が参加した形でのワークショップは、市民の理解を得ながら進んできたと思うが、今後、文化事業を行う上で、文化振興基本条例等の条例を制定をしているか。

A：条例は、制定していない。議会等で必要ではないかという議論もあるが、今のところは、まだ制定していない。

来年度から市の総合計画が新しくなるが、今年度は検討をしていくということで、今は総合政策のほうを進めている。また、文化振興ビジョンについても、以前のものが期限切れになるので、新しいものをつくらなければならないと考えている。

Q：墨田区では、こういう施設については、市長部局で行っている施設と教育委員会で行っている施設があるが、先ほど文化会館という話があったが、この施設は市長部局が運営をして

いるのか。

A：この文化プラザ（かるぽーと）自体の施設の管理の所管は、市長部局であるが、館内にある中央公民館は、教育委員会の生涯学習施設になっている。補助執行という形で、教育委員会で、今は実務的なことを行っているが、もともとの文化プラザの所管は、市長部局である。文化振興ビジョンなども、その市長部局でつくるよう検討をしている。先ほど言った文化会館は、教育委員会の所管である。

Q：今、こういう文化施設を教育委員会から市長部局に移せるように法律改正がなされているが、そういう話はあるのか。

A：もともと文化自体の政策は、市長部局の所管になっているが、今のところ施設そのものを、教育委員会から市長部局の所管に移そうという話は出ていない。

【「自由民権記念館の運営」について】

Q：自由民権運動が進んだ理由であるが、高知という土地柄か何か潜在的なものがあつたのか。

A：答えがなかなか難しいが、一つには、幕末の時期から長崎とか、高知でいえば開成館といつて、蘭学等外国のいろいろな技術を含めて取り入れようとした施設をつくっていたことと、明治維新で薩長政府に土佐からもかなりの人が入っていたということで、自由民権運動がなぜ盛んになったかという、土佐の参加者の中に議会政治の情報や知識を持っていた人たちが、できるだけ国民の声を反映できる制度をつくらなければならないと考える中で、民選議員設立建白書を1874年（明治7年）に板垣退助らが提出するが、それが却下される中で、板垣退助と共に明治政府を辞めた土佐の人たちがかなり高知に帰ってきて、そういう人たちが運動の中心になった。それがさらに、立志社等の民権結社が市内にたくさんできて、演説会等もしながら、そういった思想を広めていったことも影響があつたと思う。

Q：当時は、どちらかという、長崎等に西洋文化が入ってきたと思うが、その当時、土地柄として、そういうようなところと交流があつたのか。

A：高知は桂浜等、海に面していて、今では飛行機や高速自動車道しか考えられないが、当時の物流や文化の流れは、海を通じての交流であって、長崎とも船で通じていた。大阪とか江戸とも船の行き来があつた。また、桂浜に近い豪商の家には、世界地図もあつた。

Q：私の記憶が間違えなければ、確か自由民権運動の100周年のイベントが4、5年前に福島で行われたと思うが、どうか。

A：福島と秩父と東京、そして高知でも行っているが、4、5年前であれば自由民権120周年である。私は、今年の4月に自由民権記念館に戻ってきたが、その前に自由民権記念館にいたときに、自由民権運動100周年ということで、1981年に横浜で自由党結成から100年、1984年に早稲田で秩父事件から100年、そして、この自由民権記念館ができる直前の1987年に、三大事件建白運動100年を高知で行った。その流れがあつて、110周年を行っていないので、120周年を行おうということで、福島と東京（多摩）と高知と秩父の4市で、持ち回りで120周年のイベントを行おうということで行った。

Q：特別展で、手塚治虫展を行ったと思うが、これはどういう関係か。

A：自由民権記念館の基本的なコンセプトは、自由民権、近代史、芸術、文化という幅広い企画展を行っていこうということで、1年目はめずらしさで来てもらえると思うが、2年目になると来館者が少なくなるということで、当時、朝日新聞の支局長が、非常に多くこの記念館のことを取り上げてくれていて、また、その朝日新聞社が共催で手塚治虫展の全国巡回展を行っていたことで、全国巡回の途中で寄る形にするということで、高知で開催してもらっ

た。それで、有料で開催し、親子で1万人が来館して黒字になった。

【「龍馬の生まれまち記念館の運営」について】

Q：高知県立坂本龍馬記念館と高知市立龍馬の生まれたまち記念館は、どちらが先にできたのか。

A：県立坂本龍馬記念館が先にできた。高知市立龍馬の生まれたまち記念館は、平成16年にできたので、最近である。坂本龍馬の生家の近くで、何もないところに、周辺整備事業の中で建築をしたが、本来ならば、実際の生家に基づいた復元ができればよかったが、図面が残っていないということで現在の建物になった。

Q：坂本龍馬を題材とした文化振興戦略に関しては、行政だけでなく、市民の中にもいろいろなグループがあると思うが、何団体ぐらいあって、どういう形で文化振興を図って、官だけでなく民がどのようにかかわっているのか。

A：坂本龍馬のファンクラブというか、坂本龍馬の研究会が高知にはいくつかあって、核となるのが龍馬研究会、龍馬クラブ等いくつかの団体がある。その中には、旅行業界の人も多くいて、そういう人が主体となっている。あと、大河ドラマ「龍馬伝」の影響で客が来てくれると、裾野の広い波及効果があるので、運輸関係や飲食関係等の人も推進協議会の中に入ってもらっている。トップは県知事で、事務局としては、県の組織の中に、であい博推進課をつくっていて、その中で活動をしている。

Q：それこそ、商店会や旅行代理店等が全て入って、そのイベントづくりをしたということであるが、龍馬研究会や龍馬クラブだけではなく、一般のボランティアも入っているのか。

A：当市の場合、土佐観光ガイドボランティア協会という組織があって、この協会は、平成元年に組織ができていますので、母体もしっかりしていて、この協会も推進協議会の中に入っている。一緒に協力をしている。

Q：地元の人や観光客等のリピーターを増やす取組みは、どういうことをしているか。

A：今は、大河ドラマ「龍馬伝」が大きなブームになっているが、これからは少し減少していくことになると思う。やはり、地元の人によく立ち寄ってもらえる施設にしていかなければならないということで、来月、龍馬の生まれたまち記念館の周辺の住民を対象にして、自分たちの地域をまち歩きして、宝探しをしてもらい、資源を再認識してもらおうという市民参加のまち歩きを計画している。そこで、参加手形のようなものを配って、自分たちもまち歩きをして地元のことをもっと知ると同時に、観光客が自分の家の前を歩いて来たときに、一声かけてもらえるようなまち歩きのまちをめざしていきたいと思っている。

Q：企画展のようなことも行うのか。

A：企画展については、今は指定管理制度により民間に委託をしているので、積極的に民間のほうで年に数回、企画展を行っている。どうしても、自前で運営をしていたときは、学芸員等も配置ができていなかったの、十分な企画展ができていなかった。指定管理になって、専属の学芸員も配置しているので、本当に魅力的ないろいろなものを借りてきて展示を行っている。

Q：映画「君が踊る、夏」の誘致は、どういう形で行ったのか。

A：これは、たまたま高知に、よさこい祭り本祭の今年の大賞を受賞した「ほにや」というチームがあって、よく県外から呼ばれて、踊りにいったり宣伝にいったりしているが、たまたま徳島に踊りに行ったときに、これは東映のイベントであったので、このユーザーが「ほにや」の踊りを見て是非、映画化したいということで話をしていくうちに、「ほにや」の中に実

は小児がんの人がいるということが分かって、それから新しい脚本を書き上げて、それに2、3年かかったと思う。そして、昨年の秋に高知でロケを一月間ぐらい行った。

Q：坂本龍馬の件は別にして、結構、映画の誘致があるが、どうか。

A：高知県出身の西原理恵子の映画は、今年公開の「パーマネント野ばら」や来春公開のものもあるし、ほんとうに映画づいている。

Q：そういった漫画だけではないかもしれないが、そういった繋がり等、積極的にアピールしているのか。

A：高知県観光コンベンション協会という組織があるが、その中にフィルム・コミッションがあり、そちらのほうで誘致を行っている。

【質疑応答後、龍馬の生まれたまち記念館を現地視察】

以上

4 添付資料等 原本添付省略

調査概要 【南国市】

1 市の概要

南国市（なんこくし）は、高知県の中東部に位置し、県庁所在地の高知市の東に隣接する、人口約5万人の都市である。市の中心部は後免（ごめん）で、ここに市役所等の行政施設や商業施設が集中している。高知県では第2位の人口であるが、都道府県第2の都市としては、全国で最も人口が少ない。

面積は、125.35平方キロメートルで、東西12キロメートル、南北23キロメートルと縦に長く、南は土佐湾に面し、北は四国山地が連なっている。市の東端を県下有数の一級河川である物部川が太平洋に注ぎ、市の中央部を縦断して国分川が流れている。南部は、高知平野の中心部をなす肥沃な田園都市であり、米・野菜・果樹などの栽培が盛んである。北部は、市域の約2分の1を占める山間地帯である。黒潮の影響で、冬でも比較的暖かい。

この地は、土佐の稲作のれい明地として早くから開けていた。また、土佐の国庁が、本市比江に置かれ、「土佐日記」の著者である紀貫之が国司として来任したことは有名である。戦国時代には、四国の覇者・長宗我部元親が岡豊山に居城を構え、長い間「土佐のまほろば」として、政治・経済の中心地であった。江戸時代、承応元年、土佐藩執権・野中兼山は、高知平野の農業振興のため、山田堰、舟入川などの灌漑水路を建設した。そして、新田の中心部に商業圏を作り、その町作りに関わった入植者には年貢・役務を免除（御免）した。やがてこの地の名が「後免」と呼ばれるようになって、南国市の中心市街地を形成している。

また、南国市は、四国横断自動車道南国インターと高知龍馬空港を擁し、高知新港にも近接していて、高知県の陸・空・海の表玄関となっている。

（参考資料 地方公共団体総覧ほか）

2 調査事項

（1）環境・教育施策について

ア 「エコプラン推進基本大綱」

南国市は、将来に向けての環境政策の理念やエコエネルギー政策のあるべき姿、策定すべき政策などの基本事項を示した「エコプラン推進基本大綱」を平成22年3月に策定し、平成23年3月末までに、南国市として具体的に取り組む施策や方針である「エコプラン実行計画」を市民の目線で策定する等、環境施策を推進している。

その取組状況及び運営等について調査するものである。

イ 「子ども読書活動推進計画」

南国市は、「つたえたい 読書の喜び楽しさを」をメインテーマに据えた「子ども読書活動推進計画」を平成22年3月に策定し、子ども読書活動推進委員会を中心に教育施策を推進している。

その取組状況及び運営等について調査するものである。

3 主な質疑応答等

【「エコプラン推進大綱」について】

Q：二酸化炭素排出量25パーセント削減の目標を掲げた形で、さまざまな推進施策や実施計画が出てきていると思うが、先ほど、二酸化炭素排出量25パーセント削減にかなり苦慮しているという話があったが、実質問題として、かなり企業や事業主に負担になるところがあ

と思う。具体的に資料を見ると、ロードマップ等、工程表が出ているが、市が掲げた目標に対しての事業者の理解とか、総論賛成であるが各論になるとなかなか進まないということが実態ではないかと思うが、その辺に関しては、二酸化炭素排出量25パーセント削減というよりは、目標の見直し等がさまざまな検討の中で出てきているものなのか、二酸化炭素排出量25パーセント削減目標のまま進める計画なのか。

A：実際には、このエコプランの策定委員会もチャレンジ25地域づくり事業の両方とも、最初の会議で、産業界の二酸化炭素排出量が多いので、機械的に二酸化炭素排出量25パーセントの削減をされたら、高知県は中小事業者しかないので、たちまちそれが達成されなくなる。現実的に不可能な絵に描いた餅のような計画になるので、そういう点については十分に配慮をしてもらいたいという意見があった。そういう中で、もともと二酸化炭素の排出量が少ないので、二酸化炭素排出量25パーセント削減ということではなく、太陽光や風力・小水力等で新エネルギーを作り出して、それによって二酸化炭素排出量の削減をしていくという計画を立てないと二酸化炭素排出量25パーセントの削減は無理であると考えている。それと、チャレンジ25地域づくり事業のほうでは、森林の二酸化炭素の吸収率はカウントしてはならないということと、ごみを削減することによっての二酸化炭素の削減量もカウントしてはならないという条件が付けられているので、非常に高知県としては厳しい。森林率が84パーセントということは、森林率としては非常に高いので、なかなか計画が立てられないということが現実問題である。ただ、手をあげた以上は、二酸化炭素排出量25パーセントの削減計画をつくっていくことは必要なので、今、各公共施設の屋根には、基本的に太陽光発電の機器を設置していく、それと、メガワットソーラーがないと二酸化炭素排出量の大きな削減にはならないので、その辺の誘致が必要である。それから、風力にも取り組まなければ新エネルギーがなかなか創造できないので、その風力発電所の適地も現地を歩いて探している。その中で、ある会社の調査結果があったので、それも利用しながら風力発電所も10基以上設置できるような方向性があるように聞いている。あと水力についても、あくまでも、小水力での発電でなければならず、特に高知県では、既に県の企業局が物部川にはダムを作って発電をしているので、小水力の発電を生かしたものを作っていきたいと考えている。それから、森林の二酸化炭素の吸収率を入れられない代わりに、木質バイオマスの利用、拡充ということも考えているが、これにはまた問題点がある。木質バイオマスの利用については、かなり論議がされているが、特に香南市、南国市の場合はハウス園芸が多いので、そのボイラーを木質化していくという方法があるが、そのボイラー自体が一基300万円ぐらいかかる。昨年度から地域グリーン・ニューディール事業で、県内全部で53基あるが、木質バイオマスのボイラーを導入して、どれぐらいの効果があるか実証試験を行っているが、昨年1基、今年20数基、来年20数基というようにまだ段階的な導入である。木質バイオマスのボイラーだけで、もし止まった場合に、全然、花粉ができないという状況では困るので、ハイブリッド化というか、重油を残したままのペレットボイラーもあるので、なかなか計画が進まない。当然、需要側が拡大しなければ、供給側の計画もおぼつかない。それぞれの計画を立てる中で、いろいろな計画があるので、それぞれ苦勞をしているという話を聞いている。

Q：企業の省エネ診断を進めているということであるが、省エネ診断をするいわゆる省エネアドバイザーは、市の職員がそれなりのスキルを身につけて行っているのか、それとも、どこかそういった専門性のあるところに委託をして実施しているのか。

また、南国市の場合は、太陽光の日照率は全国で第2位ということで、ほとんどが太陽光

発電でいいと思うが、場合によっては、各家庭等においての省エネ診断と、事業主だけでなく市民で関心のある人に、その省エネを推進してもらうための個人のための省エネ診断について、どのように考えているのか。

A：事業者の省エネ診断は、市が独自で行うことができないので、財団法人省エネルギーセンターにおいて、それぞれの事業所、ビル、工場でそれぞれの診断内容がある。当然、無料であるので、非常に有効で、工業界等に投げかけたところ受けたかったという話もあったし、民間の事業所でも、今まで民間の省エネ関連の診断を受けたこともあったが、公的なもので一回きちんと受けてみたいという話もあった。47件あったが、ほとんど断られていない。診断内容としては、今直ちに投資をせずに省エネできるもの、若干投資をして省エネできるもの、将来的にリニューアルする際にこういう省エネができるものという具体的な内容を、金額も試算して具体的に示してくれるので、非常に有効であった。今まで自分たちもそういう制度があることを知らなかったので、今後、市のエコプランの実行計画を進めていく中で、まだ受けていない事業者については、是非、受けてみたらどうかという宣伝をしていきたい。

また、各家庭の省エネについては、大きな効果はないが、各家庭のこつこつした積み上げが、結局大きな削減になるのではないかと考えている。実は、兵庫県で「うちエコ診断」という、パソコンで全ての電気設備の電気消費量を計って、それぞれの家庭でどういうところでエネルギーが使われるかということを調べる方法があるということで、南国市でも行ってみたいということで、チャレンジ25地域づくり事業のほうで、社会実験として取り上げたが環境省で採択されなかったが、今後、実行計画を進めていく中では、世代や世帯数を変えてどこの辺が有効であるかを調べて、それぞれの世帯に対して、こういうことを注意すればより省エネ効果があるということを考えていきたい。ただ、まだ具体化はしていない。あと、お金はかかるが、LED化についても、小さいものであるがこれの積み重ねがやはり省エネにつながるので、チャレンジ25地域づくり事業のほうで、数は少ないが各家庭でどのような照明器具を使っているのか調べてもらって、一定の各家庭におけるLED化による削減量を推定しようと考えている。ただ、まだ若干、器具が高いので、なかなか難しいところもある。それと、学校等の体育館の照明のLED化も、今後、検討をしていきたいと考えている。南国市も国体を誘致して、スポーツセンターがあるが、その照明の交換も業者から提案されているが、公式のスポーツにLEDが使えるのかどうか不明なところがあり、また、設置費用が高いので今検討をしている。ただ、学校施設になると特に光源等で、一定の照度を確保しなければならないが、それほど制約がないので、今後、学校施設、特に体育施設でのLED化等は考えていきたい。

Q：LEDの器具の高価さは相当あるが、実際に設置すれば相当な削減効果があることも専門家から聞いている。公共施設に使用することは、非常に大事なことでありとも私思うが、これからの対策は何かあるのか。

A：実は、平成21年度事業の中に地域グリーン・ニューディール事業があったが、その中で消防本部庁舎の太陽光発電の設置と照明のLED交換の事業が1,400万円ぐらいで認められた。1,000万円で太陽光発電10キロワットの設備を付けて、あと、400万円でLED照明に換えたが、やはり費用対効果ということで、本部庁舎全部を換えることはなかなか難しく、恒常的に点けている司令室と夜間どうしても点けておかなければならない車庫の一部をLED化した。ただ、今現在の技術では、蛍光灯と比べて管型のLEDは照度が足りない。実際に実施するには、管型のLEDとスポットライト型のLEDを足して何とかしようということで確保したという状況である。実際に、どれぐらいの省エネになるか試算

をしたところ、年間10数万円ぐらいしかない。太陽光発電を含めたら30万円程度になるが、費用対効果からするとまだまだ弱い。器具が4分の1ぐらいの価格になってくれば、投資も上向くのではないかと考えているが、まだLED自体の規格が決まっていないうし、照度も蛍光灯並みに近づいているが、それぞれの独自の規格で、機種の設定も難しい。

【「子ども読書活動推進計画」について】

Q：義務教育終了後、公立では県立高校等になると思うが、そういったところでも、市として読書推進の中において協力を求めていくという形になるのか、そして、県との連携はあるのか、また、各学校別に市としてダイレクトに行っているのか、その辺どのような連携のもとに朝の読書が行われているのか。

また、ブックスタートの機会を子どもの10カ月健診時に一緒に行うということは、非常にいいと思うが、これは福祉保健行政との連携をとる形で、病院や保健所等で行うと思うが、その場所へ行って行うのか。

A：義務教育以降の読書活動の推進については、やはり高等学校との連携ということで、各学校の司書をメインに連携をしている。県との直接のやり取りは、特にない。

また、ブックスタート事業については、10カ月健診で行っている。保護者が本の手渡しをできるという機会は、この健診が一番効果的で、合理的であるということで、市の福祉保健センターで行っている健診時に、図書館から出向いて、そしてボランティアの協力を得て、ブックスタート事業の趣旨を一人ひとりの保護者に伝えて、絵本を渡している。

Q：福祉保健センターと所管課と教育委員会とで連携をとって進めていることは、画期的である。

A：健診の流れがあるので、その健診が終わってから、別の部屋に誘導をしてブックスタート事業を行っている。保護者からも大変好評である。

Q：墨田区でも、本離れや活字離れが委員会等で大変多く言われている。今の説明で、本に親しむ環境づくりということが、盛んに言われているが、昨日、高知市の横山隆一記念まんが館に行ったが、本に親しむことを漫画から入っていくということで、漫画が本なのかどうかは別として、高知市のそういう考え方を取り入れながら本の環境づくりをすとか、本に親しむという考え方を取り入れているのか。私は、本を読むことによって話す技術とか、本に親しむことによって書く、読む、聞く、見るという感性がずっと沸いてくると思うが、その辺の環境づくりをどのように考えているのか。

A：最近、本当に子どもの活字離れが言われているし、また、遊びの内容も随分と昔とは変わってきていて、いわゆる電気製品とか電子媒体にものすごく生活が支配されているという状況がある。やはり、小さいときから本に親しむ、身近に本があるという環境づくりがあるということをベースに、そういうことを大切にしようということで行っている。漫画が導入口になるのかもしれないが、自分たちが小さいときもそうであったが、漫画も読めばまた別の読み物も読むし、また、図鑑や学習にいいものを自分で探してみるとかで、いろいろな分野のものを見たり読んだりするということを、自分たちもしてきたことからいえば、そういうようなジャンルに拘らずに、そういうものに触れるのもいいのではないと思う。漫画自体が、今は一つの文化になっているので、決して漫画であるからだめであるという感覚は、持たなくてもいいのではないと思う。

Q：母語が日本語ではない保護者にも読書の大切さや図書の情報を伝えるとあるが、墨田区には錦糸町というところがあり、200人ぐらいの子どもがいて、その内30人が韓国や朝鮮

や中国の子どもが通う特殊な学校があるが、今は通訳を付けながら授業を聞いて、時間をみて日本語も覚えてもらうということを行っているが、読書の支援体制も行っていかなければならないと思うが、この事業について、連携の仕方等を詳しく教えてほしい。

A：ブックスタートのときは、赤ちゃんを連れて、母親が付き添って来ることが多いが、来る日が分かっているので、そのときに国際交流協会の人にアシストをお願いして、通訳をしてもらっている。子どもについては、大学近辺の保育所や小学校に大体通っているが、子どもがそれぐらいの年齢になると、日本語を話せるというか、土佐弁がべらべらという感じになる。しかし、どちらかというと、父親は仕事で来ているので英語が分かるとか、日本語もある程度分かっているので、大体、一緒についてくる母親をサポートするという形で考えている。

Q：ボランティアについては、必要な人数が充足しているのか。また、ボランティアの仕方はどうなっているのか。

また、有償ボランティアの考え方を取り入れているということであるが、これは何年後を考えているのか。また、「ブックリスト絵本編」は、ボランティアの人が中心になって書いているのか。あるいは、「ブックリスト絵本編」の1ページに「自分が子どもの頃に読んだ絵本、お子さんやお孫さんなどに読んだ絵本、なんでもいいです、あなたの心に残っている絵本を紹介してください」ということで、性別や年代がばらばらなさまざまな人が書いているが、これはいいことであると思うが、この応募の方法を教えてくださいと、この「ブックリスト絵本編」は、図書館に置いてあると思うが、幼稚園や保育園等にも置いてあるのか。あと、絵本編ではない一般のものもあるのか。

A：この「ブックリスト絵本編」は、平成20年4月から平成22年3月までの2年間かけて、図書館内に箱を置いて募集したものである。また、ボランティアの交流会等にその用紙をもっていってお願いをした。もう少し男性にも呼びかけて書いてもらったほうがよかったが、いろいろな年代の人の心に残る絵本を広く集めたいということで行った事業である。

これは、子ども読書活動推進事業の一環としての成果物の一つであるが、絵本編以外のものについては、今年は国民読書年であるので、そちらのほうで別立てとして、図書館でまた絵本に限らずおすすめの本を募集している。それについては、9月に広報誌で募集をして、それをまとめて、年末には一冊の冊子を作成して、配布したいと思っている。

ボランティアについては、有償がどの程度かということがあるが、今は本当に交通費等、全てが無償で来てもらっている。最初の段階としては、交通費を支給することから、はじめていかなければならないと思っている。

以上

4 添付資料等 原本添付省略

調査概要 【高知県】

1 県の概要

高知県は、四国の南部に位置し、北は四国山脈により徳島、愛媛の両県に接し、南は太平洋に面して東西に細長い扇状をなしている。面積は、7,104.9平方キロメートルで、四国全体の38パーセントにあたり、全国都道府県の面積順位では18番目である。1,000メートル以上の高山が100を超え、石鎚・剣・鳥形等の山脈が縦横に走っている。平地は、河川の流域と海岸に点在し、県土の6パーセントに過ぎない。海岸は、東部がほとんど出入りのない隆起海岸で、西部は沈降による入江が多く、山地と絶壁が海に迫って岩礁の多いリアス式海岸となっている。黒潮の洗う長い海岸線と、北風をさえぎる四国山脈の影響で温暖な気候に恵まれ、室戸と足摺の両岬には、亜熱帯植物が自生し、中央部の高知平野は、園芸ものの促成、抑制栽培が盛んである。また、南から吹き寄せる湿気の多い空気は、全域に多量の雨を降らせ、魚梁瀬杉等の美林をはぐくむ全国有数の林業県でもある。

「とさ」の呼称は古く、古事記には土佐国健甕別（とさのくにたけよりわけ）とある。承平4年（934年）国司・紀貫之が都への帰途、船旅に記した土佐日記により土佐の名が一躍全国に知られるに至った。室町時代には、管領・細川氏の一族の子孫が土佐守護職に、戦国時代には長宗我部、一条等の群雄が割拠、そして慶長14年（1609年）に、遠州掛川の城主の山内一豊が土佐24万石の城主として入国し、幕末に及んだ。幕末には、山内容堂、後藤象二郎等の先覚者、吉村寅太郎、武市半平太、坂本龍馬、中岡慎太郎など多くの志士を輩出し、また、谷時中は南学を起し、板垣退助は自由民権を唱えて、我が国の民主政治の源流となった。このほかに岩崎弥太郎、浜口雄幸、吉田茂等の偉人傑物、中江兆民、大町桂月、寺田寅彦などの文学者、世界的植物学者の牧野富太郎も土佐の出身である。

行政区域としては、明治4年（1871年）廃藩置県により高知県となり、同9年（1876年）に名東県（現徳島県）をあわせたが、同13年旧に復し、現在の高知県となった。人口は、現在、約78万人である。

観光・文化財・風物では、日本最後の清流として知られる四万十川や龍河洞、ホエールウォッチングなど自然を売り物にしたものが多く、近年はエコツーリズムにも力を入れつつある。また、大型の集客施設に乏しく、観光客数も年間約500万人（県外客のみ）とやや低位であるが、重要文化財・高知城や古社寺の名所旧跡、室戸岬や足摺岬といった自然景勝地をはじめ、牧野植物園やアンパンマンミュージアムなどの充実した博物館群、黒潮本陣（中土佐町）やオーベルジュ土佐山（高知市）など小規模の特徴を生かした宿泊施設が多いのも特徴である。なお、全国へ波及したよさこい祭りは、毎年2万人余りの踊り子が高知市内各地を乱舞する一大イベントとなっている。

（参考資料 地方公共団体総覧ほか）

2 調査事項

（1）文化振興施策について

ア 「坂本龍馬記念館の運営」 ※ 高知県立坂本龍馬記念館

高知県は、幕末に活躍した坂本龍馬をテーマにした「坂本龍馬記念館」を平成3年の坂本龍馬の誕生日である11月15日に「龍馬への入口」としての記念館を目指すこと、坂本龍馬の顕彰施設としての記念館の機能の充実を目指すこと、生涯学習の場としての記念館を目指すことを運営の基本方針として開館し、文化振興施策を推進している。

「坂本龍馬記念館」のコンセプトは、『刻々と変貌する時代の中で、龍馬記念館の果たさねばならぬ使命は「龍馬の顕彰」、「龍馬思想の普及」に揺らぎはありません。いや、混沌の世相だからこそより使命の重さを感じるわけです。現に巷では「平成の龍馬、出でよ!」の声が切実です。その期待感に答えるのが館の勤めでしょう。「待つ」のではなく「前進」を基本に常に「チャレンジ」精神です。龍馬が目指した本当の意味は「自由・平等」の向こうにある「平和社会」の実現。龍馬記念館が目指すのは最先端の“発信基地”です。』ということである。

その取組状況及び運営等について調査するものである。

3 主な質疑応答等

Q：高知市立龍馬の生まれたまち記念館との関係はどうか。

A：龍馬の生まれたまち記念館も、指定管理者を高知市が公募して、民間が入っている。同じ坂本龍馬がテーマであるので、お互いに助け合いながら行っているが、全部というわけではない。

各記念館同士は、常に交流を持っているが、高知市だけではなく、こうちミュージアム・ネットワークというものを作っていて、お互いにそこに入っているし、当館はその幹事館をしている。今、高知新聞社のほうで、こうちミュージアム・ネットワークの連携による史跡の紹介を行っているが、今日あたりは4回目であると思うが、1回目から3回目までは、龍馬の生まれたまち記念館の人が連載をしているが、4回目は私が担当をしている。そういった形で、連携は常に行っている。資料の情報等も、同じように連携をとって行っている。資料の貸し借り等も、今後行っていく予定であるが、何分、龍馬の生まれたまち記念館は、開館して日も浅いので、資料が少ない状況であるが、常に連携はとっている。

資料の貸し借りになると、展示ケース等いろいろな問題が出てくる。当館の場合でも、歴史民族資料館から資料を借りたりするときは、大変な状況が起きたりする。しかし、当館で作ったパネル等は、全く問題がないので、龍馬の生まれたまち記念館にはどんどん貸し出ししている。また、サポーターも入れ替わりで、手伝いをしている。やはり、大事な資料については、まだ難しいところが十分あるが、当館で行った企画展の大きなパネル等、支障のないものについては、貸し出しをしている。

Q：展示資料は、だまっけていても市民等から集まってくるものなのか、それとも、探すのか。

A：業者間で探すものもあるが、大河ドラマ「龍馬伝」等がはじまってきたということで、ものすごく高価な資料が突然、寄贈されてきたりしている。今、展示している大政奉還後の後藤象二郎に宛てた坂本龍馬の手紙等は、国の重要文化財であるが、そういったものが眠っていて、突然のように出てきたりしている。確かに、毎日のように、うちの大事な宝物であるといって持ち込まれてくるものもあるが、ほとんど偽物であることが多い。ただ、今は世代交代をしているところで、祖父が持っていたものを孫に渡すということがよく行われてきているが、孫は家に置いておいてもよく分からないので、見てほしいということが結構多くなっている。大河ドラマ「龍馬伝」の効果と、当館でもこういうことを行っているということを出せば出すほど反応がある。大河ドラマ「龍馬伝」の場合は、高知だけではなく、大阪もそうであるし、この間は富山から手紙が一通出てきた。話題性をつくっていけば、いくらでも資料が出てくるのではないかと思う。それで、当館では、資料が多くなっている。しかも、重要な資料が多くなっている。

Q：開館当時は、ある程度、資料収集については予算が付いたのか。

A：予算は付いた。今でも、坂本龍馬の手紙が主で、坂本龍馬の手紙は全国に140通余りあるが、本物ばかりを集めるわけにもいかないので、その複製をつくるわけである。その複製をつくるのに、1メートルあたり50万円以上かかるので、収集の予算はかなりかかる。複製をつくることにも経費がかかるし、また、企画展に合わせて業者から話もあるが、資料があるかないかによって全然違うので、あとは学芸員の判断でどう見るかということになる。最近では、本物を見せてほしいという要望が多いが、手紙等は、複製で1メートルあたり100万円かかったり、50万円かかったりするが、置いただけでは本物と区別ができない。しかし、複製と書かざるを得ないので、コピーということであると皆さんがっかりする。そういうことで、複製づくり、資料集めには、結構、経費がかかる。また、展示ケースも、展示方法にも経費がかかる。

Q：資料を買うこともあるのか。高いものは、どのぐらいするのか。

A：資料を買うことはある。昨年、京都土佐藩邸資料が580点ほどあって、最初3,000万円ぐらいであったが、交渉した結果1,700万円ぐらいで購入をした。その前には、札幌の龍馬会、龍馬クラブというものがあるが、函館に北海道坂本龍馬記念館ができたので、そこで坂本龍馬の手紙の入札争いをしたが、1,650万円で負けた。そのときの値段が、大体、今の坂本龍馬の手紙の値段になっている。最近では、どんどんと値上がりをしていて、今年は1通3,000万円ぐらいになっている。25年前は、3通で150万円ぐらいであったので、ものすごい上がりようである。

Q：県立であるので、資料収集等については県の予算で行っているのか。

A：財団法人であるので、半分ぐらいは県の予算である。予算については、今年は、手紙等を購入するので800万円ぐらいはほしいということを要求する予定であるが、当財団の場合は公募で決まったので、ある程度は無理が利くと思うが、県のほうでは取り上げようとならない。儲けているので、自分のところで購入してほしいと言われている。

Q：資料収集については、相当高額になると思うが、どうか。

A：資料は、なかなか手に入らない。今、出ている手紙は、3,000万円ぐらいで線引きをしているが、県では財団法人のほうで買ってほしいと言っている。資料はたくさんあるが、業者から出ているので、値段が高くなっている。

昨年度の入館者は246,994人であるが、自主財源は89%ぐらいである。普段であると、フィフティー・フィフティーで、県からの補助金と入館料等で運営をしている。財団法人の中では、当館がダントツでトップである。ほかの館では、相当な苦勞をしている。

大規模な歴史民族資料館などは、入館者が年間2万人ぐらいである。この間、大河ドラマ「龍馬伝」の関連で巡回展をしたところ、8月だけで入館者が3万人あった。

Q：友の会のようなものはあるのか。例えば、博物館友の会のようなもので、会員になると会報が送られてくるとか、寄付金を受け付ける等、サポーターのような制度はあるのか。

A：当館では、行っていない。

ボランティアの制度が数年前に導入されて、カルチャーサポーターといっているが、美術館等は、その時に友の会を一度解散して、サポーター制度に移り変わっている。当館も同じであるが、ボランティア制度はあるので、数人のカルチャーサポーターはいるが、友の会はない。また、当館は募金でできたので、その時に募金活動をしてくれた人が、龍馬クラブという組織を立ち上げているが、友の会とは性質が違う。龍馬のファンクラブのような形で今でも存続はしているが、友の会とは少し距離がある。

Q：館の収入は、入場料だけか。

A：ミュージアムショップの収入もある。

Q：基金のようなもの、例えば、龍馬基金のようなものを作っているのか。

A：作っていない。

大河ドラマ「龍馬伝」がはじまって以降、坂本龍馬の写真の使用は1回5,150円もらっているが、これだけでも1,500件ぐらいくっている。坂本龍馬の写真は当館のものだけではなく、8体ぐらいいり、ほかはみんな個人が持っているが、個人の写真がどんどん値上がりしていて、おりの写真は、今は1回の使用で75,000円である。

Q：使用料は年間5,150円で、ずっと使えるのか。

A：1回の使用料で、ずっと使える。

普段であると、年間で企画展等があるとき等しか使わないが、ところが、大河ドラマ「龍馬伝」がはじまって以降は、博物館や記念館からの電話ではなくて、業者からの電話ばかりである。普通は、年間で50件ぐらいまでであるが、それが1,600件きている。

Q：平成21年度の都道府県別の入館者数を見ると、関西圏の人が一位であるが、平成22年度も同じ状況か。

A：大体、同じ状況である。やはり、商業の関係で大阪の人が多い。兵庫、大阪、広島、岡山そして東京、神奈川の人が多い。リピーターもその方面の人が多い。また、就職をして、よく転勤になってこちらに来るとか、旅行のついでに寄るとか、出張の途中で寄る人が大変多い。また、坂本龍馬とかかわりのある県から来る人も多い。九州では、長崎が多い。

Q：この建物自体は、どのぐらにかかったのか。

A：資料購入等を入れて、約10億円である。民間のコンペでできたもので、設計をした人が武蔵野美術大学の高橋先生である。10億円のほとんどが建物の建築費で、多分、2億円程度が館内の整備等の経費である。土地は、高知市で提供しているので無料である。ここは、高知市の公園用地の中で、市が県に貸している。

Q：毎年買う資料の予算は、どのぐらいか。

A：坂本龍馬の資料は、毎年あるわけではないので、基本的にはほとんど予算がなく、複製を作る予算だけは毎年とるようにしている。来年、何の複製を作るかによって、予算の額が違いうが、100万円、200万円程度である。そのほか、本当にほしい坂本龍馬の手紙等については、その時々に関と財団に相談をしている。

Q：坂本龍馬の銅像とこの記念館が、何で桂浜にあるのか。

A：まず、坂本龍馬の銅像は昭和3年にできたが、坂本龍馬は海と船にかかわった人であるので、一番海がきれいに見えるところに立たいという思いがあり、また、銅像は募金でできたので、その募金の中心になった人のこししかないという熱い思いから桂浜に銅像を建てた。それで、この坂本龍馬の銅像を説明するものが看板一つであったので、それだけでは寂しいであろうということで、すぐ近くに坂本龍馬の館を建てようということで建てた。それも、募金活動の中心となった青年たちの思いから桂浜という一番の景勝地に建てた。自由の女神をイメージして建てたらしい。また、この地は、昔は海上交通の要衝で、浦戸城の跡地でもある。

当初、坂本龍馬記念館を作るときの候補地としては、ここは3番目ぐら이의候補地であったが、できてみたら、やはりここが一番であったということである。しかし、資料を保管するには、潮風の影響がかなりあり、この潮風と雨には泣かされている。

最近の資料を持ってきてくれる人の思いは、ただ保管をしてほしいということではなく、皆さんに見てもらって保管してほしいということである。保管するだけであれば、歴史民族

資料館に持っていけば、きちんと保管してもらえるが、そうではなく、見てもらって保管してほしいということで、自宅の倉庫に置いておくより、人の目の中とか、心の中に保管してもらったほうが良いという人が多い。海援隊約規等、すごく大事なものがきている。やはり全体的に、資料を持っている人の思いも、変わってきているように思う。自分のところに置いておくより、みんなに見てもらいたいということで、当館は入館者が多く、また、全国から来ているので、それで、みんなに見てもらうことが喜びみたいになっているのではないかなと思う。

Q：そういう資料は、館に寄付してくれるのか。

A：皆さん、寄贈をしてくれる。また、自分の世代まで自宅に置いておいて、次の世代になったら寄贈の手続きをしてほしいという依頼も多い。税金の問題もあると思う。

【質疑応答後、坂本龍馬記念館を現地視察】

以上

4 添付資料等 原本添付省略